

塩川 吉廣 (東京)



端島 (2013年) P80



端島の夕景 (2024年) F100

端島は、長崎半島の西 4.8 キロの海上に浮かぶ島で、1810 年石炭が発見され、1870 年に採掘を開始、日本有数の海底炭鉱として発展した。

出炭量の増加につれて坑道は 1 キロまでに及び人口も最盛期には 5,000 名を超えた。このため狭い島内に高層アパートが建ち、遠くからの眺めが軍艦土佐に似ていたことから軍艦島と呼ばれるようになった。

学生時代、自ら反戦運動の中にあって、最初に描いたのは、広島原爆ドームであった。原爆ドームは、いつしか自分を長崎に導き、迫害の中、信仰を守り通した教会を訪れ、日々祈りを捧げてきた事に想いを馳せて五島列島の教会を描きはじめた。

この五島の教会取材の折に長崎の端島の存在を知り、島に渡り、その厳しい環境に驚き“強い閉塞感”に襲われた。以来、五島列島の教会シリーズと併行して、軍艦島シリーズが始まった。

いま、無人と化し廃墟と化したその姿は、栄光と悲惨の象徴そのままである。広島原爆ドームに始まり、足尾銅山、五島列島、軍艦島と、光と影とを追い、平和と祈りを願って描き続ける。

第 19 回蒼騎展 (1979 年) 会員推挙
蒼騎会代表 審査委員 文部科学大臣奨励賞